

現代社会を『関係性』という観点から考える

⑩ 「見える」ことと「見えない」こと

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦 恵子

連載 14 で『「開く」ことと「閉じる」こと』について書かせていただきました。

その後、連載 15 では『つながりが支えるところ』と題して、我意を通した結果「閉じる」生活となってしまった結果として社会的孤立に至り、心身状態の悪化を招いた高齢者（単身生活者）の事例を紹介しました。

今回は、この連載の流れの中で『「見える」ことと「見えない」こと』という切り口から、現代社会を関係性という観点から考えていきたいと思います。

1 「飽食の時代に食事に事欠くような子どもがいるのか」

私は御縁をいただいて、あるエリアで子どもの居場所の運営を支える取組の端につながらせていただいています。「子ども食堂」だけではなく、勉強や遊びなどを行う居場所でもあり、地域に開かれた多世代交流の場を展開している団体や、高齢者などにも開かれたいわゆる「地域活動」の取組をしている団体もあります。

1つの団体だけではなく、エリア全体の様々な団体がネットワークを形成し、フードバンクなどともつながりながら、コロナ禍でも活動を続けています。様々な団体が多様な

活動を展開していくにあたって、このネットワークの役割は大きく、ニーズと活動、間接的な支援者と実際に現場で活動する方々をつなぐ役割や、行政との連携などの役割を果たしています。

ある時、ネットワークの事務局長を務めておられる方のお話を実際に聞くことができました。「小学校区に1つ、子ども食堂や子どもの居場所を作ろう」という機運が盛り上がってきた時、地域社会の方から

「この飽食の時代に食事に事欠くような子どもがいるのか」

「そのような子どもは私の地域で見ることはない」

という疑問の声が出たと聞きました。

私はこの言葉を聞いて、これがまさに現在の「貧困」や「生活困窮」の特徴だと感じました。

ごく一般の方が、目の前の方が困窮しているかどうかを判断しているのは、一目でわかるような出で立ち、つまり服装などの「目に見える情報」であると私は考えます。そして、その「目に見える情報」は、個々の「貧困」のイメージによって、「困窮しているかどうか」という判断基準ともなり得ます。

しかし、「貧困」「生活困窮」というイメージ

は、人それぞれ、もう少し乱暴な言い方をすれば、世代によって異なってくると私は考えます。例えば、戦中戦後の混乱期を経験されている方にとっては、「戦災孤児」のようないでたちがまさに「貧困」を具現化したイメージかもしれませぬ。また、「昔はみんな貧しかった」「我々の子どもの頃はもっと苦労した」「それでも頑張ってきた」という自らの経験で、現代社会における貧困からくる生きづらさについて、「まだ頑張りが足りない」と捉える向きもあるのではないのでしょうか。

ただ、現代の貧困の大きな特徴の1つとして「見えづらさ」があり、しかもこの「見えづらさ」には次のような3つの特徴があると私は考えています。

1つ目は、まさに「目に見える情報」に反映されにくいということです。「こぎれいな身なりをしているから」「スマホを持っているから」という理由で「貧困ではない」と思われてしまう場合もあるということは、生活困窮者支援の現場では良く耳にすることです。しかし実際には、地域社会の中で少しでも「浮かない」よう、服装などはリサイクルショップなどで整えるなどして必死で工面している方は少なくないのが実情です。スマホも、日払いのアルバイトなどを見つけるツールとして必須のものとなっており、既に「贅沢品」「遊び道具」ではありません。

2つ目は、地縁・血縁の希薄化等により、支援の窓口にとどり着くまでの情報を入手することができず、本当に困窮している人が困っている方が、どうやって支援の窓口にアクセスしてよいかわからず、そのまま地域で気づかれないまま埋もれていってしまうという現実があります。

3つ目は、困った時に適切に援助を求めるといふ、いわば「援助希求能力」に関することです。「他人様に迷惑をかけない」「自己責任」と

いう価値観が強すぎると、本当に支援が必要な状況であっても、周囲に「助けて」と言えない状況に追い込まれてしまい、事態が一層悪化してしまいます。また、何とか「助けて」と言えても、支援機関で自身の状況を適切に説明できず支援を受けられない、あるいは、適切な相手に相談できずさらにトラブルに巻き込まれてしまうということもあり得ると考えます。

現代の「貧困」「生きづらさ」を考える時、このような「見えづらさ」があるという特徴を持っておくことは非常に重要だと私は考えています。そして、その「見えづらさ」は、困窮している当事者だけではなく、地域社会の側にも原因があるのではないかと考えることが、息苦しい「自己責任論」から脱却する1つの方法ではないかと私は考えています。もう少し踏み込んでいえば「見えない貧困」は、「見ようとしないう貧困」であるとも私は考えます。

ちなみに子ども食堂は、単に「食事に事欠く」状況を支えるだけの場所ではなく、子どもたちが安心できる居場所に身を置くことで、周囲に対して適切に支援を求めていくための力を蓄えていくための場所でもあると私は考えています。

そして、支援を必要としている子どもをはじめとして、困っている人々の姿が「見える」か「見えない」かは、「当事者が周囲の目につきやすい場所にいるかどうか」ではなく、「そうしたことが見える目を持っているか」、もう少し踏み込んでいえば、「社会情勢や地域の課題を意識して生活しているか」どうか強く影響していると考えます。

各地で展開されている「子ども食堂」ですが、本当に必要な子どもたちやその保護者に情報が伝わっているのか、という点についてはまだ課題があると考えています。冒頭記載したネットワークでは、「支援が必要な子どもの情

報は学校や役所の窓口が一番把握している」という共通理解のもとに、学校や子どもや家庭に関する事業を所管する公的機関の窓口が、その地域の子どもの食堂や居場所（中には地域食堂として高齢者の孤立を防ぐ活動をしているたり、多世代交流の活動をしていることもあります）の情報を把握し、ニーズのある子どもや家庭をそこにつなぐという取組をしています。もちろん個人情報取扱いについては万全の注意が払われています。また、そうした場に出てくることができない事情を抱えている困窮家庭があることも念頭に置いて、当該家庭の意向を確認した上で食品や生活物資を届けながら安否を確認する活動も実施しています。当事者は多様なニーズがあることを念頭に置いたこうした活動を続けてこられたからこそ、コロナ禍でいわゆる「三密」を避けなければならない状況下においても、感染拡大防止に万全な配慮をしつつ、パントリーなどの活動を展開することができたのだと考えます。

2 「見えない」のか「敢えて見ないようにしている」のか

自分の生きる地域社会は「安全・安心」であり、周囲の人間関係は信頼に足るものであって欲しいと願うことはごく自然なことです。しかし、そうありたいと願うばかりに、地域社会に生きる一市民として、目の前にある課題を「敢えて見ないようにしている」ことはいかなるものなのでしょうか。これは有名な話なので御承知の方も少なくないと思いますが、首都圏のある地域では、児童相談所の設置について地元から強固な反対運動が発生しました。ブランドイメージのある地域にふさわしくないということもその理由の1つだそうですが、この反対運動の根底にあるものは、児童を取り巻く昨今の厳しい情勢を「敢えて見ないようにしている」と、自分（の家庭）はそ

ういった厳しい状況に置かれることはない」という、地域や社会の課題と自分を完全に切り離してしまう姿勢ではないでしょうか。

個人の主義主張に踏み込むと言われてしまうかもしれませんが、そうした考え方をする方が増えていけば、地域社会全体の包摂力とでもいう力が痩せ細っていくように思われてなりません。人間は自分を守るための強固な鱗も牙もない、生物としては脆弱なものです。しかし、群れ（ムラ、今でいうところの地域社会）を形成し、互いに助け合って今日まで生き延びてきたという一面があるのではないのでしょうか。仮に今は日常生活に支障がない状態であっても、思わぬ疾病や負傷によって生活に支障を伴うような心身の状態になる可能性は誰にでもありますし、それにより生活基盤を失ってしまうことも想定されます。そうした時に、「それは自己責任だから」と切り捨ててしまう厳しい社会を選ぶのか、生きづらさを抱えながらも居場所を見出しうる包摂的な社会を選ぶのか、ということを変えて1人1人が考えていく必要があるのではないのでしょうか。

3 「一本の道」から「見える」もの

冒頭では、子ども食堂・子どもの居場所の運営を例に挙げて、支援を必要としている子どもを始め、困っている人々の姿が「見える」か「見えない」かは、「当事者が周囲の目につきやすい場所にいるかどうか」ではなく、「そうしたことが見える目を持っているか」、もう少し踏み込んでいえば、「社会情勢や地域の課題を意識して生活しているか」どうかが強く影響していると考えます。

と述べました。この点について、私の経験を踏まえて、もう少し掘り下げたいと思います。

国家公務員の中には転居を伴う転勤が重なる職種もあります。私自身は実母を実家で介

護していた時は広域の異動については配慮していただいていた。よって、実家がある地域、つまり自分が生まれ育った地域において、社会福祉協議会の福祉委員や苦情解決第三者委員などの活動をしていました。同級生やその親御さんのいる地域でもあり、多くの方の見守りと声掛けがあってこそ在宅介護が成り立っているという感謝の気持ちがありましたので、ささやかながら自分のできることで地域に恩返しをしたいと思ったのがきっかけです。そこでは、業務では得られない貴重な体験をさせていただき、小地域福祉活動の重要性を体感しました。

その後実母が施設入所となり、本格的な広域異動が始まりました。単身赴任も多く経験しています。遠距離介護をしながらの単身赴任でしたので、職場と官舎、ターミナル期に入った実母の療養型病床（当時）、義父母の介護のための帰省先（配偶者の官舎）との4つの地点を往復するような生活は日々綱渡りのようで、どうしても自分の官舎周辺のことには目が向きづらくなりました。

しかし、ある時かなり大きな規模の自治会の理事を引き受けることになりました。

義実家の介護も重なっていた時期でしたし、財務関係の担当であり苦勞も多かったのですが、自治会の理事を引き受けたことで、自分の官舎周辺の地域社会にも自然と目配りをするようになったことが大きな変化でした。自分の実家、配偶者の官舎、義実家の周辺の地域社会に対しては当然のように出来ていたことも、遠距離介護をしている私の単身赴任の官舎はどうしても「仮住まい」という感覚がぬぐえませんでした。いくなればそこは、職場に通勤するための拠点であり、業務や様々な執筆作業の準備をするための書斎であり、義実家や食事療法が必要な配偶者の料理をつくるための厨房に過ぎませんでした。私自身は子どもが

好きだということもあり、お隣の世帯のお子さんには声掛けなどをし交流もありましたが、生活時間帯などのずれもあり、それも頻繁ではありませんでした。

ただ、自治会の理事を引き受け、地域課題を共有しそれを解決することを重ねるなかで、たとえば目の前の一本の道も「自分の通勤経路」から「子どもたちの通学路」だと考えるようになりました。

そうすると、「目に見える」情報の量も質も大きく異なってきました。私は疾病の影響で戸外では杖歩行をしていますし、長らく介護をしていた関係から、道路の安全性などには平素から目を配る方です。しかし自治会理事を経験するようになり、「ここ、植木が茂り過ぎていて子どもたちがひっかかると危ないな」「あ、電灯が切れているので、早く交換しない不用心だな」「害虫駆除の時期には、戸外で遊ぶ子どもや親御さんには声かけをしないとイケないな」といった、より多くのことに目が向くようになりました。

つまり目の前の「一本の道」は同じであっても、私自身の地域社会の課題に対する向き合い方の変化によって、より多くのものが「見える」ようになったのです。

今回のテーマは、『「見える」ことと「見えない」こと』です。両者の差は、視覚によってどのような情報を捉えるかというだけではなく、どのような姿勢で地域社会の課題に向き合うのかということが大きく影響すると考えます。また、視覚として情報を捉えていても、敢えて「見えない」状態になることもあります。

その理由としては第1に「無関心」が挙げられるでしょう。第2には、自分や世代に特有の価値観や思い込みも多分に影響してくると思います。前述したように、「飽食の時代に食事に事欠くような子どもはいない」と考えてしまうと、それだけでなく可視化されにく

い子どもの貧困は見逃されてしまいます。第3には、関心を払いたけれどもそれどころではないという「忙しなさ（せわしなさ）」もあると考えます。

この時代にあって、より包摂的な社会を作っていくためには、まず地域住民1人1人にその自覚と責任が求められること、地域課題に向き合っていく姿勢を涵養していくことが必要だと考えます。

そのためには、できるだけ多くの人と「つながり」、その関係性の中で「日々消費されていくニュース」とは異なる、地に足の着いた経験を共有しながら、地域課題との向き合い方を折に触れて自己点検すること、家庭や職場以外の「第3の場」（つながることのできる場）を持つことが必要だと私は考えています。